

横浜港

前回のサロンでは日本を代表する貿易港として神戸港を取り上げました。今回はさらに大きな存在であった横浜港について述べることにいたします。

横浜港で驚くのは輸出入ともに圧倒的なシェアを誇っていたことです。現在でも入港船舶数第一位、海上出入貨物量第二位、外貨コンテナ取扱量第二位、外国貿易額第三位ですが、江戸時代から明治、大正にかけては圧倒的な一位でした。そして輸出入とも重要な取引相手がアメリカ、中国でした。何だか今と似ていますね。

年	全国		横浜港			
	輸出額	輸入額	輸出額		輸入額	
			金額	シェア(%)	金額	シェア(%)
1860	5	2	4	83.9	1	57.2
1870	15	31	11	74.8	23	75.3
1880	27	37	19	67.8	26	71.9
1890	57	82	32	56.1	41	50.0
1900	204	287	96	46.6	110	38.3
1910	458	464	225	49.1	154	33.2
1920	1948	2336	766	39.3	710	30.4
1930	1470	1546	450	30.6	393	25.4
1940	3656	3453	960	26.2	1097	31.8
1950	298033	348196	65901	22.1	64611	18.6
1960	1459633	1616807	321966	22.1	319600	19.8
1970	6954367	6797221	1691494	24.3	1165837	17.2
1980	29382472	31955325	6338792	21.6	2684291	8.4
1990	41456940	33855208	6667194	16.1	3187618	9.4
2000	51654198	40938423	6108719	11.8	2853460	7.0

註:金額は 1880 年までは百万ドル、1890 年以降は百万円

この輸出入品の中で輸出は圧倒的に生糸が第一位でした。特に戦前期においては 1930 年の 64.6%、1910 年の 57.8%など半分以上が生糸であった年も珍しくありません。生糸は開港以来、1941 年(昭和十六年)に至るまでの八十三年の間、輸出品の第一位を守り続けました。

それだけ生糸が輸出されるからには横浜でも生糸関連の産業が発展することになります。スカーフ、ネクタイなどが戦前から今に至るまで横浜の主要産業となっているのは、このような背景があるからです。

その後、戦争中には満州、中国向けの機械、戦後には一時的に電気製品が第一位となりましたが 1970 年頃からは自動車が不動の第一位です。

輸入品は明治期には綿でしたが次第に鉄となり今では非鉄金属が第一位となっています。このような輸出入品の変遷が京浜工業地帯の軽工業から重化学工業へと変遷していった様子を現しています。

京浜工業地帯を作ったといっても過言でないのが浅野総一郎です。欧米視察を行った浅野は先進国では巨大船舶が直接横付けしているのに驚き、日本でも同じことが出来るようにするために横浜港の埋め立てを行います。

始めのうちは理解されなかったのですが、次第に協力する者も現れるようになり、川崎から鶴見にかけて 150 万坪もの埋め立てが行われました。この埋め立て地に建設された主な工場としては古河電工、東芝、三菱重工業、味の素、JFE、旭硝子など日本を代表する会社が並んでいます。

その後、関東大震災、第二次世界大戦、接收などを乗り切った横浜港は戦後も貿易額を伸ばし続けたのですが、京浜工業地帯の復興発展があまりにも急激だったために荷物を積み込むことが出来ない「船込み」の状態となります。これも新しいふ頭の建設などで乗り切り今に至るまで重要港湾の位置を占め続けています。

この横浜港から輸出された重要品の一つが玩具で 1920 年(大正九年)には 1,200 万円、1955 年(昭和三十年)に 79 億円を記録しています。戦前から戦後にかけてのセルロイド玩具生産は約 90%が東京で製造され、輸出品は約 95%が横浜港からアメリカ、中国などに送られました。青い眼をしたお人形は「アメリカ生まれ」ではなくて「アメリカへ行った」セルロイドだったのです。

横浜港の歴史は 150 年を超えました。今までがそうであったようにこれからも日本における重要な港湾の地位を守り続けることでしょう。